



古今考述集

二

記和文

號 178

冊 2044, 内

文庫





古今著聞集卷之二

釈教才二

此神は唐よりわづらひて釈迦の教をてんらふおのほけり
 警成の月之れ禿林よき者うとて一千五百八十年
 にわづらひて我の才二十代純明天皇十三子小百海
 邊のりそと老く令洞釈迦の像経編福蓋きり
 あり所門のりそと老くわがめあひひる成をのべれ
 大長あこがふの神画なるを人のせめておけそじ
 ちをれど付像と難波塔にや内じとてか蓋を焼
 ころのれよきり造るるをりかたてりて内書るをけ



あり敷蓮用の崇俊乙皇之代の君御位のいまり
 て海傍いまりわまのころに推古天皇の御宇願戸を
 年々皇子東園の信よそれり南面のきふうりてま
 ぐんされぬとされぬ信の真澄とてしつたりこれ
 よりびうの御信弘通して幼強ゆる事耶
 我のれは信六智達を弘めまふ所ありたまの御明
 天皇の御孫用御乙皇の太子は母の宮を那比美入此是
 は母の養よ金色の信事くまれ世成まふおれあり
 孫がりのハつてくは腹よ厚くんぬハ救世やうの
 西方おりのせりひくおどりて口よ入てんぬてんぬ

ぬひは多しとまみれはむらぬ蓮天皇位おつたまふ
 元年正月朔日生まれまふ時赤光ありて覆後
 おいし海もは身甚うくじ日月の後よく物作はむる
 年れ一月十八日の初づうあふ向ひてまふ信を合
 南無佛と唱まふ六たびは年百歳より始く僧尼經
 編を抄く信せり八年よ又見理といふ人信りてまふ
 礼してしう敬礼救世記世音佛梵書方粟散まとお
 ぐしきと光とを川たまふ又肩よりひりて成むら
 あり又親述年厄草像深勸れ石像と信とを菅藤我
 馬子と信縁信法よ海くをまくと成てしせり廿一年

天下痛むるに死するもの後を耐ふのべは引割
 守をれ長井の中長は務海く野見みくは法と位を
 ども養うていづく我々のあれ神由之御よ務海大長佛
 法をひらめねたまふりて痛むるに死ねるのほ
 もととも名なき人れ命全う候どもいふりてみこ
 のりとてはては法を傳はせし御別守を伴成妙く
 書信を焼やろ候ては法と滅亡とは耐は法をれ
 せんくとも男太子悲泣煙燭一はふりて死りなり
 もふりて書はして西風うきとて東より火くぞ
 内裏やけぬも後をよれ御定用明天皇位は法を法

てふよふは法を身させもお藤我大長執成候くも
 おらあやろびさせはは法をより又ひらするを
 まらく大長のみ候なりて宣りく之室の妙なる事
 人のいふごとくは海よ大長んをせりりるに
 中へは耐ふの守をの運長が野見と階下に養ふ
 守ととわににせめて付成さん人をもひそく守をの
 長よ若あつとるにりて御成はれ候よことりり
 考成のひは中長務海同く考成にして守をを
 藤我大長太あふりて考をりく考成が考成
 守こくして候はれ考とて考の考も考の考

四年十一年して大御年此後より多岐なり泰河橋の
 ねまのち成り心く宣天皇御と云ふ他一めて平基
 うやとのさねはて親を養へて宣りて親と云ふ
 御めまひくく宣天皇の御と云ふて云々
 大后同じく親して申すくひをまむむ御申ふ大御
 わり申すくひのよのかりてのべれ氏のよみなり
 親と云ふくひのよのかりてのべれ氏のよみなり
 又と親りのわくと云ふおぼへて宣天皇ふらひく
 と云ふくひのよのかりてのべれ氏のよみなり
 宣天皇のよのかりてのべれ氏のよみなり

一これへくも首を切りてのわてなり
 化度親のわてなり
 為麻のちの推古天皇の御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 くりて麻呂親王此建王の御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 別由親王の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 親王善慈の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 御此此地の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 の中よ金剛一擲の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 此御の行者の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ
 て百餘の御と云ふ御と云ふ御と云ふ御と云ふ

今更りてあはれくろの如く家までよ調りてとて先く娘
 井とほのふあしくあはれをむかふ小まのりあはれとて入る
 嘆きだといふは世同くさるる文化人の女忽ちあはれ化
 小あまごよ個々のやとふ別々の心持はあはれその所
 のあはれは化女さうけあふ女人兼て把を油とてあはれ
 して好くさうけいけは傷の乾きみあはれ成の娘より實
 此娘よあまのふまあまの男はあはれとてあはれとて
 一と行とあはれさうげりらして化女とてあはれとて
 小うけあはれあはれはあはれとてあはれとてあはれとて
 娘あはれあはれはあはれとてあはれとてあはれとて





兜跋摩訶摩訶南無阿彌陀佛一經發起の序分の二
 三條正交の旨歸下れく上中下三處の儀
 と平八教在教の元これ親經一經の文釋を
 信佛の金を化凡の口にて口向の場を以て
 志ありての如く

往昔迦葉說法所

今來法起作佛事

響音響西方故我來

一入是場永離苦

平教のありあり響音響西方故我來
 他人の音ふよりてと息候のこゝが縁ゆゑく回をそそく
 ことごとく知識の如きものあり信の人れまふひつる

此の如くもさばくも小よりて古洲のとも海ふりて
 と真成来てこれをもあまふ同く味成さくのえ
 てあふまてせご上人らう増補とてを真味
 とくわてあらひそのあか時先強ふ病若き
 成づくもくは異送る云我病温泉此効證となの
 びくも思ふいせんゆに苦痛さぐるもこのひ
 じに事とては海は物ほよ入れ恙出よあての推り
 病成さけん病らうのよ上人あひむあをさく病あり
 まふらぐはのづらう苦痛さくるりかんといふも
 してその書ひとわらうとくはくはがもえころふくを

如くまればさばくわらうてあはれゆよあひ思く病あり
 りやまふらぐはくもさばくもさばく病あり病あり
 やんぬとれとえれど業源此身之を時伝若云
 ありこれ温泉引者よ上人代恙出さるんがく免よ
 病若のあふせん下はらうて忽然さくくこれまひぬも
 何上人を教て堂舎を建てる業源此身を安ん
 せんく邪も病を業しあふ必病也とあせとてあふ
 ひらひく本意とあげ給のまよれらうそまふれあふ
 とまふくさく免く今の昆陽とて建給つるは
 小字中九郎とまふはその一と天保徳宝元年二月

寧ろ八十あくとりり改より終るとて讀まひふゆき

法の月久くくえく解くわのふも

あやあのおんひろくくしん

あやあのおんひろくくしん

ありそあれをくあを改改いあまよ

あやあのおんひろくくしん

改改あやあのおんひろくくしん

あやあのおんひろくくしん

あやあのおんひろくくしん

あやあのおんひろくくしん

山紀ふつとく

于時弘仁九年春天下大疫帝自深黄令紫

端握緝紙於几掌奉写般若心經一巻予範海經之撰

綴經旨之宗未待結願之詞藕生族于途夜爰見光

赫奕是非愚身戒德金輪御信力所為也但諸神

舍寧奉誦此秘鍵昔予陪誓舉說法之筵親聞此

深文豈不達其儀而已 是府の山紀の山紀活海の

大くくふいまごのふもあん

弘仁八年の長傳及大師波油の教とてびんがえんよ

範紫よええあぐの作あわりのきりえんれ千しあ記を

と倍りなり大殺多二千式百法華經二千於八千衆
 城よりくも海又うまれまよてえんが法苑珠林と稱
 小法より大や前きく是れ我不住法者久應氣年
 さいとい値遇和尚は西番道かめ能持く功徳成
 法苑何足謝法矣而南家所持法衣まねく
 せん人ぶく富敵とひくといひむくさいのけさ一
 ひくさいの敵とさぞえと和尚大空の力業密納文
 云法苑より稱宜秘承こめり法苑とひりよりいふ
 く法苑見こるすくまきりくえんのは夜亦今ふ觀山
 振中堂此經苑よりりる相法隆孝の時を法苑

見多きり後白河院法苑のし紀も撰をを法苑り
 初院大原山起文云平依山王出法苑於大唐由文
 持法苑還中船海中老婦現於予船而伊家新經
 西明社之和尚受持佛法多為是出世為護持
 兼向之者也乞言說之後予既隱予著岸申云
 家即遣官使而持佛法以彼運納於大政官
 于時法苑の法苑亦來云此月廿五日有一持地家先
 彼地早以惡定申於公處建之一伽藍寺出自身法
 法家為護法神法加持矣所謂法苑八見護持主
 法之表佛法藏者王法將藏矣予出查中于先

院從千光院至山王院又山王院宜子法門運此所者
 明神備此比公未代心有喧嘩致之案何者各更比
 長下之之内此山可盛支今二百家我亦見勝比本
 世九生可為依所真隆佛法護持王法至彼地可
 定者明神山五別為西塔即近江必志賀郡國城
 案內於住僧亦安傳等申不知案內若一人之老比在
 謂茲待出來之老比年百六十二之此也建立之後僅百八十
 余年之有建立壇越子孫去即茲待呼彼氏人姓名大友
 於堵牟麻呂山案去於堵牟麻呂生年百四十七之此也先
 祖大友与多奉為天武天皇所建立之此地先祖大友与政

大友之系比之場四心被荒給大者待大德年來云可領
 此寺人渡唐也遲遲東之由常語而今日已相待人來也
 今若今以此寺家子付屬此寺之領比四至內也愛他人
 領地而朕代核人心諱曲為之刺史稱私領之比也
 人死力并之早齧國可被比返者付屬之後山王還給明神
 集比野無量之眷屬園遶他人之所不知見也見知明住塔
 野亦與之人引率百千眷屬來向以飲食奉饗明神之處
 老比在茲待到於彼明神之在所遙以花悅即比在奉入刑
 隱不見之時向神明備此比在奉入忽不見是何人耶明神
 答之老比在是弥勒也案為護持佛法住給此寺耶與人

古今集卷三
者是三尾明神為訪我來之者于運到之處有松岡坊
牟麻呂者不知此老比丘案內年來此比丘不飲食不
酒不湯飲常到領海邊之江取魚鱉為食之粟而渴
和尚忽隱之悲哉々々不情音哀泣今大元共見住房年來
于置與類皆是蓮華並根葉也按是知此例人之由今茲
已隱我院早可被真隱者也者問之此寺之名謂湖井寺
也情若云何此人答云乙智天武持統以三代之乙皇各生
浴之取定初之取脚湯仍水汲此地內井寺浴之由俗詞
結來伴井水依經三皇所用号此井者予向此緣起深見
地取充如大唐青龍寺寺文付屬畢別為西塔共還中山

別為共系內裏奉申由執急造唐坊仲像法門遊教
此寺改所井寺成三井寺其由何者伴井水三皇用給
上世寺為傳法灌以之庭可汲井花水之夏令繼跡勒三
令脫故成三井寺也
智度宗傍心于六之七也
の法又此寺は後よあるゆに法相花叢の法又と修學
とあるは東坊南才一孔室ハ中影の附より鬼神はまじ
とて肉體も形なく荒室とて心なく怪人も形なく
まじとて傍心いまだありありなる附看取のなりなる
のありは後より鬼神をめぐれり

くまをてつわふりふきりそ後一門の傍お経く香
しく今よるえびとえん

更給之記曰真宗御座金峰山御座云古先相傳之
昔撰土有金帝山金剛院五并住之而彼山諸羅
漢地而來金帝山別名被山之山名捨身窟号河古者
五體龍昔小元無事傍之妻女子名河古少而能辨
穢強之時所作河古者試及已過貴代度他人也其支者
家河古服念捨身世名已得終身所作捨身悲性
看于時已化龍其猶人也而先秋害所菩薩冥護嗣
石塵龍故所先害貞觀年中親由法師為見竜多性

外無給之於請之因親將見也以天火無事云傳電見龍
舉首于式丈斗之及分親由形於云字八於法花江
將心曲若勿害於官於精氣害將及身親海大忍心
神迷惑分由命并須寫件之終此是云身冥失龍而
如須更云旁即除忽物身公佛身不在也親海行感之
如親寫經將供養之清台於法師為請所若於法師
固辭長菩薩告曰承今請汝勿若辭源至方便不誤
音續之若於感悟起請若并若比至方便不天凡親經不
志不若八於法花經今見一卷香隆之信云實元八行肉心
の人之神日律師入室實平法也之灌以心才之天德

口年英早のうきりきつは六月九日仁多居
 孔養理法と修と終々に法中ふ多ううきり結
 れ日小成と表叔と身の時及よき結たはとせして
 執養也がりきり伊正そのはとやそく法わくとら
 かろろ強さげて法中よまこふくろん初人の時が
 ろ此まろりさこのはりく大毎まれらあふとこえ
 開んろりありと慍およはでてきりきり人わやとこ
 ふたり寛た使於伊教ハ寛平は信の比源長幼の教因
 親の子法皇入室つやま肉使受法灌以の才子より
 行業法より志強まされし人千日と後と修

修せりあり護法考此大強おさきり又なを孔養理の
 法よ長強とかくあせり能中智皇衣担切其光
 世の由ひく人可んわを

兼平元年の及の比身業法脚あるは坊中と強と強
 きろ大あつ悉いそまろく見くきり飛考れ地とあ
 てたれあろ強りあはして強をよき強よ強はとそ
 表電しそこの悉夫よ入るつとれ日火雷天赤くら
 強きんごあひく身業よのこまひ強はとれこの小強
 とんとちひよあ強をたひこの強をひりの身業強
 やくろこのあひ大強の悉強らろ業強らん初強

但雨也いぢぢの雷をよ沖とを津のたねりくこれりあ
 わくめんふのりて昔成くゆまがわらと足懸て
 おもんべいねまの真象見えぬよとの辨喬公の湯は
 ころみりり何の火りあつてし六月お又内葉へまん
 とあおかりしとねまひくおえくねりて

修徳法師の座をねりて考くううとよまおあひ
 きり此金剛山の若よとなる死人のくもひわりのまり
 かりまきまつてとそえゆりて毒あわくわのくをと
 おせりもふ独地とあざりころみんべいひびとて
 こつあまきり輝光たよわやとてとそあふとまりて





あれおふ人れんごのよとて成るんとおそるよまの
 あきふ中又日の秋身よ人きくいとくをハかんが
 びう此骨^こりのまやんはらしておの独^{ひとり}飛^とびたつ
 なるやいふあてくごふひのく聖^{せい}をあげておら
 けよりごのひごてれうあそれをさつりていおあを
 ひれく独^{ひとり}飛^とびと津^つ花^{はな}よわごごりごう後^ごたごで
 つてごをりてうよ衣^いのそご成^なるごりきりごん
 そあご今^{いま}おの若^{わか}ふごてんごよ津^つ花^{はな}ハあ生の^う
 れ人^{ひと}かりやのふご成^なるごりぬ又^{また}ひごの山^{やま}摺^{すり}りよ三年^{さんねん}
 ろりてあるあ生のごをよ毎日^{まいにち}法^{ほふ}苑^{えん}院^{いん}のあをよ

三時のみ法を修し六年の礼を修して返向
 きり三時護持くつら成りりく花とりのみ法を
 て修しきり同修の師のすあや七月十日有安
 修験くべ成りて那ひ急よ調音の才子小獲
 との座んどもく入城験ふつひあきりては石
 小獲法とつげきり中六れつひまへ先津差ゆく
 のり次修入知く内津差がゆく生ひ七歳より父母
 れりくしとせく山林を歩くく入城より成りて物と
 せりくは力とて死承くよん成りて修験法に修ん
 とくひく今く力命をけり成りては成りて若利たり

あまのまじがひのく光りく成りては成りては
 だくとも耐くこれ成りては成りては成りては
 ら小修入いりくこの成りては成りては成りては
 おまてくともいりくこの成りては成りては成りては
 とくともあがりくこの成りては成りては成りては
 元命ゆりては成りては成りては成りては成りては
 乃業年やけては成りては成りては成りては成りては
 海よとてよとせれ成りては成りては成りては成りては
 わくその成りては成りては成りては成りては成りては
 免くといひく成りては成りては成りては成りては成りては

びりてまゝ人所とらてくも耐くくのふまうとたどり
つたおけうりまれくま人のまふよから居ぬ二もよ
を成まうたひよぢうみくへまざりらん人なりとて城が
えんといふ遊の会併之味終と成事の上たあられ
きり又まうりあのころや上人とて先まひく道場
繁落ののりさんまうる信男女あゆむくせうまを
りめらふ一まうこれぞえんの聖人化夜衣生の方だ
多れ相ふま付あひざり

一しひま南ははゆ地併といふ人の
ころものうまのほぬと形一

子観内信ハ秘密無學人まうる信あそくがひざり
を也上人れを及ふうりてえんはて海人へ何ぞ
わ後と流るうく自他よりとまもふあもあまよ
人あまゆりまらん信ハ元原雅拙承上あま
菩提を量や定期跡勅下生く脱く遷化の時
より形まをにざりにはは信とて唱てれなりおざり
指中納を教あひひまらん大伴命終の後まはれ守よ
うけび生所と志あはれとけのやくまゆよ因梨
八威してつくまづびてまふ菩提のあひふのく
ひりつるゆ地後をまうるあまら

一、大僧正定照ハ法相宗為多クハ今天元二年
二月九日金剛峯寺に座す小補して同十二月廿日大僧
正に遷じて年八月十日自ある長者與後を別為を
辨一ヤキヨク云

身後を承る金剛峯寺別為職事

衣定服は年一耐補法花一系彼念佛三昧先年承
極承一紀云小近者中見可陰忍起一此定服
依件本寺務所示現也此後年先為後極樂
遊辭由件

天元四年八月十日

大僧正定服

以後一系承應ある一棟の櫻井樹ありノトて極
と云ふより大仏頂呪一返と補して加持のるをれら
花塚と仰せり又新よ新く上格一ヤキヨク天
人知現一々承承ありて夜より中ノり後承は
十羅刹の系後救済ひごとく承承又不動の玉を
一々擁護一々承承ありて承承元年三月廿二日
入滅者の小承承ありたもの一系承承の月初
室下と後ひのらゆは法花院と補して承承
の承承に於て命終即往生安承承世果恒河沙等諸
佛如来の文殊女之返補して承承承承承承承承

此法花理と備してとてくく一切法はとて
 定かんを備ひて居るがごとくなりとて
 と備はるゝとてなりとてとてとてとてとて
 性信二不親といふ事のと備はるゝとて
 附はるゝとてとてとてとてとてとて
 とんとてとてとてとてとてとてとて
 月神光宝珠とてとてとてとてとて
 院山鹿病の附法とてとてとてとて
 け親とてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとて

此法花理と備してとてくく一切法はとて
 定かんを備ひて居るがごとくなりとて
 と備はるゝとてなりとてとてとてとて
 性信二不親といふ事のと備はるゝとて
 附はるゝとてとてとてとてとてとて
 とんとてとてとてとてとてとてとて
 月神光宝珠とてとてとてとてとて
 院山鹿病の附法とてとてとてとて
 け親とてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとて

親念をせぬひく^{ごん}念珠とりげん^{ごん}をた^{ごん}方^{ごん}を
才子と足^{あし}に^{あし}く二三^{さん}市^しぐり^しる^しる^し何物^{なにもの}こ^ころ^こを^を
いそ^{いそ}は^{いそ}子^こと^とあ^あく^く入^いり^りる^るし^しん^んを^をど^どく^く
冥^{めい}白^{はく}と^と物^{もの}ま^まく^くお^お疾^はと^とか^から^ら人^{ひと}ま^まの^のぐ^ぐら^らの^の
み^みら^らく^くお^おの^のれ^れん^んら^らる^るら^ら無^む座^ざ二^にの^の九^く月^{げつ}廿^{にじゅう}七^{しち}日^{にち}つ^つあ^あ
性^{じやう}生^{じやう}成^{じやう}げ^げを^をせ^せぬ^ぬま^まり

堀河^{ほりがわ}の^の長^{なが}有^ある^る長^{なが}の^の時^{とき}刻^{こく}を^をあ^あと^とば^ばぬ^ぬら^らく^くら^らる^るま^まり
と^とぞ^ぞ延^{えん}暦^{れき}の^の傍^{はた}を^を覚^さえ^えの^の中^{ちゆう}に^にま^まま^まと^と字^じを^をら^ら茶^{ちや}碗^{わん}
れ^れは^は平^{へい}生^{じやう}れ^れる^るま^まり^りを^をら^らる^るま^まり^りは^は茶^{ちや}碗^{わん}の^の中^{ちゆう}に^に
な^なげ^げら^らる^るま^まり^りの^の事^{こと}と^と我^{われ}世^よの^の人^{ひと}ま^まり

永^{えい}観^{くわん}律^{りつ}除^{じゆ}ハ^ハ病^{びやう}者^{しや}あ^あく^く法^{ほふ}を^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
者^{しや}は^は苦^く知^ち識^しく^くの^の依^い若^{じやく}痛^{いた}深^{しん}求^{きゆう}苦^くを^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
ま^まり^り七^{しち}宝^{ほう}の^の法^{ほふ}を^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
我^{われ}頭^{かう}次^じは^は性^{じやう}生^{じやう}と^とぞ^ぞな^なげ^げら^らる^るま^まり^りは^は金^{きん}利^りを^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
な^なげ^げら^らる^るま^まり^りは^は後^ご年^{ねん}小^{せう}引^{きん}の^のて^て足^{あし}を^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
な^なげ^げら^らる^るま^まり^りは^は二^に粒^{りゅう}と^とり^りを^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
何^{なに}ぞ^ぞ佛^{ぶつ}の^のみ^みを^をん^んは^はこ^この^のあ^あを^をり^りて^て存^{ぞん}在^{ざい}を^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
ら^らな^なら^らる^るま^まり^りは^は溝^{みぞ}式^{しき}と^とつ^つら^らる^るま^まり^りは^は十^{じゅう}法^{ほふ}日^{にち}と^と
小^{せう}引^{きん}の^の苦^くを^を修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ
と^と修^{しゆ}づ^づみ^みれ^れと^とく^くこ^こに^にあ^あ

くらば膜目の赤野小面ありて正念小修之念佛
 二ありしとなりてねり小きり年七十九才小わが
 王覚観が着小正精念よる信ありび座一なる覚観
 をも例して信儀と體作とありて又書は信源
 の律師なり句うげて言徒あは法性極果
 平島院信正信源の系流は源信後宰相の母の
 着よ中堂小まのりころる小三尺其著源也事と
 いふ記も傳く見くころとて正してころひあり
 せりまぐくく台院の信源もくせりまぐくを信
 流よひられく言は信源よ娘長よきり実相坊大阿耨

小法源一之系れ大信源新の信源秘法とて秘
 密に伝へてくは源の信源もくせりまぐくを信
 小とめは金堂小勅とれ傳へては又更と送をり士
 有月日より不動の信源法と勅傳せり七十七
 年十一年信源を金堂の信源もくせりまぐくを信
 多記の信源もくせりまぐくを信源とては又更と送をり士
 五餘りおのよその信源もくせりまぐくを信源
 有信源とては又更と送をり士
 てわくせんが信源もくせりまぐくを信源
 教令八千余りて又母の教百るんのであり

中より後をみくも下をく木動れ後戸をよせり
をき守時差伸又木動きれ仕者くも成わじと
足後たりぬけ二宮人ごりや海童子れを我れ
みじくもたを海波ぞとまひりきりたのよみ
年よ常成りらぬれよ又細中波をん壇上よりほ
みきりて乳よあつりて持くのよと志述ま
中よやくとれと後戸二十日勤むる海と
の終をきれたる信風波をききふきのま後ま
此非仏ふて日初しる半所のきりこれまき
はり一回のま人もあつらひてひより産をり

わく強ともみ呪とてそく目強道の終ひを海は信
就難西傍池席室れり河流のぞくもそ身波わら
西にまがらん雲の上木臨飛して命やんとあゆ
くりをりるもみ小強然よまのあふ命は信
上のまをりあつけてまとも船くもまのま容
教度麻な海絶角の幼童はあまのま人信のあ
一浪えけぬりおるるまゝ知をよとむのふ下を
ましくりて威後とてびいひくがまを念て神れ
ぐみ死のまもきりるる番屋あまのま神信
は猶子よまもく藤堅れぬぐ一ま子よまもり

傍正修乃よりせむく大なるのまごむらうてりる女師
 日來厚いひよりづらひまひくも命のあまらあり
 まひまほたる傍正修乃つらひとて今つ愛もた
 まつらんぐあふいとまじい油波もほのほしきかきり
 弟度の内よりてま入程とらみくうびれとくふた
 うくくまへるのまじいおまへるまおがれくはしむ抱も
 いとれぞあめあうくあゆのまひやまらぬ傍正これ
 けりてくたごそく世の中とまひまてく二宮はか獲を
 ねくまれんまらくは怖畏は女師のほほしあつら
 のそらほりんそく掛子つらみはかおとてまらせれ

まり信縁よりまらくまのりやまらくごんの掛子
 ませれんまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 だりまらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 信縁のまらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 此のまらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく

まらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 まらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 まらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 まらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく
 まらくまらくまらくまらくまらくまらくまらく

ありては深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 松尾のまじりておのゝちをいへりては
 河和のまじりておのゝちをいへりては
 女わりのまじりておのゝちをいへりては
 ぎり傷を深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 下傷を深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 西もやまじりておのゝちをいへりては
 傷を深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 ぐらふりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 本よむれおのゝちをいへりておのゝちをいへりては

あれをえりては傷を深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 傷を深きほどにまじりておのゝちをいへりては
 西もやまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 五まじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 とうまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 てたまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 けうまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 まじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 ひうまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては
 くとまじりておのゝちをいへりておのゝちをいへりては

自分と覺悟しての如く佛に就きて法を授けしむる可き加念仲性中我々復如法に起眞衆入諸衆信
 紳又備と及とるくこれに服あよも文あり梵天王
 那乾陀天以下一切の法五の法天九曜廿八宿也三千大千
 世界乃至微塵教所有一切の法天神夜眞道心にも
 それと各百入法つり不思儀未もこれより凡法の法
 入の人の三千或百八十人の内日射と恒くは生れ
 げはりの卒八人也實と人日月春秋六十一めて七月
 されりてく死を志りてつるは生れそつひとど
 られり入推の射も方からりてく如鷲毛と

大承竟教律戒の如く上人は生れては我遂に中
 五上界に生れしむるは融通念仏なり也と
 少物の如く大承山の住人なり三十年昔の三昧を行
 ぎしるの如く毘沙の天よりて我ありて上人は身
 後一掃りの如く影像と身身小法していりて後法は
 弟垂せし世よりてりび上人は法の時六後法は
 三昧おこるひつり射所よりて法を告ぐて意の如く
 入と足念なりと肉身をうりてと而身成佛れ人々
 法を傳ふるはあり

仁平武年七月二日宣法入るる法を傳ふ海より

をれどおとく衣冠とたゞあつて礼に志すはひる一切
破くそえ世帯ととげし人かりは月そおせし
そぞの日記よりゆり

抄津法法流さとのふもりの村人ほしそそり
そらふ忍心傍そあつて老傷をせりかハ観の
敬徳也りの多年法流しおそく恒出といひくつを
ねつあけあふ事りく年流おりのをれど人皆ゆ
あり兼安武年七月十日揚足ふりて法流神
よふもりの流よあつておつてはくもりて白
立鳥情子つてお男れつて當をさつてつて
置み所お

てあまのそあわれいげくよりれ人ぞと回されど
あふまふふよりれつてつてせうけおとひそくまみとる
あふよりせをれど被見よ

誦請

閻浮提大日本国栲津國清澄寺

そあ忍心坊

有来十八日抄始魔魔以千万人之抄經者可被
十万劫法流經被系勒者依阎王宜誦請
とく世をりそあいあつて身りしゆり
結文書くもゆくとくそあつて何所の経より

されどもいぬ御付へて後をせむる小老信一
 おひきの昔成りてりなれどびくもわが御匠匠
 たりその用とあはじしといひされば房小御りては
 りてくおこしつべし信おふたの事とぞうの事り
 十八日申のたりのりふつて今も就ありまのよ
 ぶひく世中もわやそくおぼゆるとて折れし御
 の御事と息とよきり扱ひの目辰のたりのり御
 たりと名持法花經其心甚清淨の傷成りて
 やど備しきりて後をせむる御事とぞうの事り
 五文小めされく十字人れ信よつてなりて法花經

後十方ねかりりて法王とて息とぞうの事り
 きえとて所る玉の御事とぞうの事り
 わるもい眞言なるた麻よつてあり居りて
 物語りまの介よ持法花經其心甚清淨の傷成りて
 ちその内へ御事とぞうの事り
 信王の意と信王の化別へ敬礼甚大信王天台法
 擁護者とてまの御事とぞうの事り
 の業成りてまの御事とぞうの事り
 とうきみあててまの御事とぞうの事り
 又法花經の事とぞうの事り

年まゝくわてきくは生をあげてのまむ
あり法勝大とひと現るとおのふてうわりの
これをも入道の男よとつ孫あぬる船きぶあひ
まづひくもたれ侍をばよ宗南防備初り宗その
とらえ何らけうんきらあんのいんよあこのこ
わきとひきれどよらびくあひまきりあうふ北人
北山がの礼法あきうてと現りうんてふはぶくか
あおたうべで何のよもせんであづこちうべ法
はんとひきれど宗南あそのふかこれぞ下侍の人
よらういふとこらひあぶうべといひきれとねて

とぞいづこへきり宗南房さうとよくあそくしけ
ひひ法勝をひきりてとん礼法とあびくちてあめ
あみく人らもとたにあをれどあひかては
てあひもこらうあまよあのまぶ利きとあひか
きらえんれあめとこそあはるるや城を修繕場乃
織よて何なる法あぶと男とけけめつ法とてく
けあをれとてあめかひあ地たる法と南房はてあ
あひとひくまをあの上人乃の法園わく難行若
あああすのいふとあまこり人のいへりあんと
かああすいふとあまこり人のいへりあんと

夕一終末はとりゆとくをわひら動者れとく成実
 或の枝末とわらうあれ地獄の寄成はくのみ日念す
 一とせめくく入きのびくたハ餘鬼れあにせむらえ
 又かりと考成はくはほこみハ成あえうとたれ成は
 くらハ書生ののじくひをこくたうくひひをまら成も
 ちんぐ身成を海りてあゆめ成法とよみく飛降と清
 除と成く已小三碧道れ若愚とくししてとや無培を悟
 の室とよう成の也上人出教生免の思わりのことたこの
 心とよきよまはしてていづりづらくみは利者れ成て
 り成すもれりくわらうくはとららあめれれあめりけ

心成今て成のあきく成成がこり成の急成は
 ていれをあつてりやうやうとく成くありそくね
 後ハあまはとすてすくうのくひくあぞあつちり
 りやとりの男とあてりれ成ば人よりそくあぞけい
 を成いこく成とらぶく一そ又後もと成りこり成を成とぞ
 大いこの成の成者也

永万元年六月八日とれとれ成花王院の成士とゆあ
 小う一り成のむくし成れ成みより成ハ成の成り
 けりくの成らうと成山成をりやとやよ最成あり成る
 が成の山れと成り成入と成成老成成と成いそ成押

此のミは何の料小なりとぞと仰りせられん之の兼任
と今いふは下りの物とぞめてしあるは猶もあせ
あひく制止給ふやうしりて又あゆみの傍のミカ赤むせ
りり水れ末とばなるさんとてそとてわきま川せり
なぐりせれぬ水さうとてそとくほくく落さる城水はそ
くはあれども八切塗水耳赤利益方便してわんは
ぞとくく糖を志くくむむとせとの中へさくまき免
ふぎり志はなれんなんのうらだれとぞり此下にうけ
よ水にせんてをれ九つとぞり又のぬさかんとは
わぬはうとぞせぬも高河をあらはるるはうらせよ

此の海より舟のつらぬ

形ある年三月十五日の酉時大坂入道福系より持現
者より信りては花院と物候と承りてわりのせん
御の下由布施さく信院之上進ア教上人の面と
衆人右が衆らうひひのまのあくとめせり信院に御
幸願く其一日小のせおりしゆりの信下三人の由り
乃わりのをり信院の志民借録れあまわらひ計成を
録にふまひてしりは信院とそをせ給ひるに海ま
りり屋とつりくるは場おせとけりの御いふは
まうを海又早八壇の河原池獲がも何りせり信院も

三月十七日と二十日と將領一
等並に導除法下と歌勅貴小傷心小なりはなり云
傷心と法の後勝通の法下と舞でしふこえきき
よふがのう夫よこつてはれぬと歌中さあはま川
まふそとてそみぬごまよ内かふつてくまはれけり
さう那ぐるみあせはるは傷心の上よめてまうらん
おどろくなきはあづは法下とて傷心のでしとらて
よよわくらんも帝代のみやとけめとて一府
ぢり法下ゆり耐毎中と出をれを傷心なりく附
せしむる事ふとぞ

念河海耐突早年依もろをゆよ好忠信内
の字後傳沈憲法下法程有徳白のつごふ新林
小新やまてくさまらふ西成かしてあうぶんその
かうやうと持天後初よわうて上藤控お傷那是
序上よつとまりの耐の良法はさりふありのきり後
法解よりび法らうれそくまみま

和のよふひくをさけく君うの
あくやうぬつれとあそわりのを

解脱房道世れ後盡坂の傷心れをまは湯浴れあ
小まのびく湯の別限とまらぬやと或人れ新屋

立るれわりのを心よは文宗我と頼トせらる解脱房
思くわりのを心よは文宗我と頼トせらる解脱房
きれん返事！

い中しあふとん一かどもあふゆゑ
うとろふわをもあふゆゑ

くもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かりき流し斜面をきく幕下アされぬかへうも
か約よりごうごうごうごうごうごうごうごうごうごうごう
二夜よりその心くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
うり相きごゆりぬらぬらうくくくくくくくくくくく
能成及んまははまそあひやアされらうかの幕下
まゆ人まわらうごらきゆとぞえはられぬゆえ上
人へ一向も候の人ありき人まわらうごらきゆとぞえは
業の化分をさるん舞をがさ川の金説もアすまを
を流わらうごらきゆとぞえはられぬゆえ上
半は暗転と隠編と足ゆて燈明をけきまも光的
あゆとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

空しく易い易い此道小松をむく海のわたりを敷文
 樹と見化佛化茶成ぞんども海元久二年正月一日の
 輪をえんく退此の時南庭成ぞりきるん見光げんド
 たりきんじ縁公地よりりてらるらひ終り終ひきり
 建曆三年正月廿八日遷化八十歳は生の瑞お小わび
 けりて其基和とてんぞいふよま二人けきよまをりあ
 りて天壽の道一尊花冠教より三百年よりあゆみ
 老病より体よりひく再回蘇睡なりを海がけ生の細
 ちろづとていひては同もんえ年もころり建よまきり
 とけりうよ泉極糸ハ我中西也室一つあふは生はは

親者瑞玉の聖氣来現しく眼およごりおは生
 かりろくの念生れとめくとの終て女官此面のと記
 たりろく念念仏経成せりて回ろく女の日辛四よえ
 明遍照の四句は文とさるく慈覺大師の九條に袈
 紗衣とちやくして袈紗衣よして袈紗衣とてあしそ
 ありり結ぶきり念佛者をよまりて後ともは
 唇舌とてくくひりすよ返りり之順次は生る
 がひりさりのく
 三升ちれ公胤信正きりえんのとあお日十九日公等作
 とのぞくそ海界悟陀羅尼并よ海跡跪の像とてり

てせりて後みヶ年終く 建保四年四月廿六日の如信
心の夏亦見ゆりきり

上人告云

は生々業中一日六時刻 一心不乱念 一切寂寂才一
六時 林名者 生生必决定 雜言不决定 高修定者業
源定惣考養 云流然况法 感善不可盡 味欲先速攝
源定如地力 大勢至菩薩 前生為化故 乘此界度者
くく志然くくさりあひまをり 勢至がさの能めと
ゆふ事これより符合と信するなり
この并上人おさあてハ山院浄室ふけりぬりて又学坊

まのりくくそのおまのハとんくび兜ハ命ぐ人よ何げと
さうしてゆげくびらと文章お接りて身みあ
ゆのんやんぬてざり法師よりりて高雄小侍せ
くろれぐくもんよん改入くわくく海あも化よせ
りせり又学坊高雄と此の海とて最通とせき勢て
引老死を海とて高雄上人の海とて事よとひく盤
敷のりて海とてなりゆとて持く山れあへん人も
くもらぬあましくさ人んくきをりひつてと最通
が食物とあましくさ山の中よりくくさくくさ
念七八人かんをやむくささりてくくさあぬ盤敷と

かりて海へぬきし山の仲ふ二三月も居くゆくまじく
 まる事二三つよて度くぬくべしなり文字あはれり
 て中々人代少くまひは娘ど指者のあおことぞいひま
 びふ人暇暇は智恵とん結を心大祿基賢がまう
 光音といひ信のよ上人の才あまは信をう身信結
 て信を信がぬりせりううそくそくを信をそし
 して聖をぬとん結とて中ままもよまうくのあまは文
 取く結といひ信をぬくく結をぬよまうて事結
 びみわらわらびまうくはみまの結を信をぬりし
 りくわく結をぬく光音とまびく山まの結を今結ハ

うにのまむのやと多月見よとて房とゆく法
 川のまむのやと多月見よとて房とゆく法
 それよのわりとびりうのまむのやと多月見よとて房とゆく法
 けららまむのやと多月見よとて房とゆく法
 一は、左をまむのやと多月見よとて房とゆく法
 又、右をまむのやと多月見よとて房とゆく法
 光音とてまむのやと多月見よとて房とゆく法
 信石とてまむのやと多月見よとて房とゆく法
 おれるはまむのやと多月見よとて房とゆく法

その松原^{とら}はよみよりありきり正月の松原のりせよ
居くらん^{とら}新ん^{とら}さきまはよわれのありきれん

岩のうへ松のこうけよまみ^{とら}深の

神のわれやけーその玉

尺その神^{とら}道^{とら}徳がみまんとそ弟子十人といひど
て天竺へまよりゆらんといれく家は長日大の神よ
ゆへ海やえんとそりの山原へあききき家は兼六十
みひど^{とら}けおりて地よゆと上人をうやまひけりも後
生而紀^{とら}伴必湯^{とら}浅敷くむうれよりきつに上人の伯母
なりき海女房小付く喜百の林山^{とら}徳富るき海を

那^{とら}佐^{とら}佐^{とら}をち^{とら}獲^{とら}せんくそえよいふ事^{とら}お徳をいれよ上人^{とら}お徳
とまよく^{とら}海く^{とら}う^{とら}由^{とら}ん^{とら}の^{とら}心^{とら}を^{とら}の^{とら}徳^{とら}を^{とら}れ^{とら}が^{とら}よ^{とら}今^{とら}多^{とら}い
き海^{とら}ま^{とら}び^{とら}平^{とら}信^{とら}せ^{とら}き^{とら}び^{とら}海^{とら}も^{とら}あ^{とら}の^{とら}ま^{とら}の^{とら}徳^{とら}に^{とら}ま^{とら}志
ぬ^{とら}あ^{とら}や^{とら}ど^{とら}も^{とら}ま^{とら}ど^{とら}海^{とら}を^{とら}れ^{とら}さ^{とら}う^{とら}が^{とら}事^{とら}を^{とら}れ^{とら}お^{とら}び
ぬ^{とら}ま^{とら}り^{とら}時^{とら}ら^{とら}平^{とら}信^{とら}の^{とら}徳^{とら}を^{とら}け^{とら}り^{とら}て^{とら}う^{とら}ま^{とら}ひ^{とら}の^{とら}我
海^{とら}が^{とら}う^{とら}ま^{とら}た^{とら}ん^{とら}わ^{とら}り^{とら}て^{とら}う^{とら}け^{とら}り^{とら}を^{とら}あ^{とら}れ^{とら}け^{とら}り^{とら}ぬ^{とら}ま^{とら}を
う^{とら}ま^{とら}ひ^{とら}か^{とら}よ^{とら}り^{とら}て^{とら}上^{とら}人^{とら}は^{とら}向^{とら}く^{とら}ひ^{とら}ら^{とら}徳^{とら}お^{とら}り^{とら}て^{とら}上^{とら}人^{とら}又
か^{とら}や^{とら}う^{とら}そ^{とら}れ^{とら}の^{とら}海^{とら}を^{とら}い^{とら}さ^{とら}り^{とら}て^{とら}ま^{とら}あ^{とら}ぐ^{とら}ら^{とら}徳^{とら}を^{とら}い^{とら}ま^{とら}ま^{とら}み
座^{とら}れ^{とら}り^{とら}ん^{とら}が^{とら}の^{とら}海^{とら}を^{とら}い^{とら}ま^{とら}れ^{とら}う^{とら}ん^{とら}を^{とら}あ^{とら}き^{とら}り^{とら}ぬ^{とら}ま^{とら}
か^{とら}され^{とら}れ^{とら}ぬ^{とら}この^{とら}女^{とら}房^{とら}を^{とら}い^{とら}わ^{とら}り^{とら}て^{とら}堂^{とら}座^{とら}の^{とら}ひ^{とら}み^{とら}座^{とら}を

くけくを度せりも其のま極端のどくふわくも此處
 により清とくく其の清かうがくくわたりは其の耐
 上人修作して被よびやうくくせ年比華嚴經の序よ
 せんおのうきく解脫一終くくすれはは佛位極
 多きり上人まらうく清とくくわく清のそくま
 まくま清とくくふわくくく解脫一終くく清は極
 くく極端のまも其のありまきりくの白濁はくく
 半地抑まておのひきれじんわやくくくまひの例り
 て清くまらうくまらうくたりたりまらうく三ヶ月とくく清
 ぐくくの上よは清をまらうく清をまらうくまらうくまらうく

上人寛延元年正月十九日入滅の時まわくひけくく念
 釋らうて毘盧舍那五尊ふむひまを真座くくく
 くらた上おりく光のまを并み字泥羅尼在布字統
 多きトそ後まおまお所於中於地卒ては十九重
 下尼天蓋お桓旛不退は無教方便度人天光ま
 て程の速速たわりまらう一切位のそみ天を清とて
 玉鏡とくけく一命の疑滞なり重きと極めく
 釋らうはくは我々をまらうくくべ利者と事とせ
 まらうまらうく一切はを清とてまらうくまらう
 三十九字下尼殿の由まらうくまらうくまらうく必を

と採取さしめ給へし双取ありあもて成那がし
 又さあまの云地世大世法津智利書母同為氏さ
 薩从地中仏長子随穴思惟入佛境と備へ南意
 勒がふしとあま返さあしとあまをて信作の念仏
 とまき先ん佛牙子三人の家号とさあま不勤号九根
 小ざんドまひさ佛ゆま一人とて急救況と備せ
 めまうり又文字文殊況と備とむくれとて法信
 家号とさあま神呪と備と承る不現信書其作
 法信の月とて法ありきりり法信れりて成那
 ていへく

我昔所造諸惡業 皆由無始貪嗔癡
 從身諸意之所生 一切我今皆懺悔
 と備しおりりて定下小信りて入釈ありやとくして
 右根ありて姉姉のぬ入滅の後場在右根の二此
 樹ありれらるる佛入滅の衆よまらるる右根ありて懺
 とさあま今ハくも成とまてうとて此後ゆく南意佛勒
 并とまて己の罪は補ぶるごとくあておりりあま
 けり異書とまらるるまて終りの寿場承法うた
 記とるいへ海わらば
 越後の信心親教よりかりきり耐あひく大とて海

くらにゆかりありたりをゆふ中字は法を記す
 香積寺子も明らにみえ給りてなをくりしてあり
 されよつとそあひまをり根あるんとあひくを法をり
 そのうち目ふたつひくを答ありて東寺の長者
 法勢大僧正持佛半車宣旨までとらふ所を
 ありしたるをうりし事し

後名相法堂元法下集し一ころをるに近事也
 のそもぐう一念も秘んてまけくわくそあまのいれ
 う中しきくうてあまのわりのをれを記さばあ念ふわう
 信と一念ふとるべしとぞや信を信

南無大おふよむ信ありきりも言へ事く海衆と
 きあひを信よつひよりもあまの信をりて信あり
 つたよ下向んと志は家にぬれよまの信ありて珠珠
 持て信ふとるていひ信をたの珠准后もあせえ
 信りてとてまれとらり信り珠の色むとたよ
 信ありとらぬの信ありきりあけれと准后とて
 事くまふきりそのまの信准后の信あふ事最の信
 あり信珠を記りせまかと信然とて信と信の中
 たりふお信のめと信をりて事あり信あり信
 約よ信珠をりて事あり信ありと事あり信の

珠能融の傍に宮内局あり終りてふいぐ宝珠坊
おられしれも海にぬん

神祇権の副大臣は親王年長大臣著一筆本字の
志わりをいふもいしゆくやいそり聖のびやくた

ひ影をふふけく一月二枚半つ書き海に十の年
あふくぬんはちくもあひくぬれいひ海に前権

大副同も家治のくぬら海に小智教してひ影をふ
まゝ一筆本字の切とくきり信長の後信長に
わぬりに親王ももあふけくいひ海にひひりもや
あふりりぬ家よあふだお海にきりひひりもて

たのづらうおあり大城をぬりし海にけりかく海にく
まゝ一筆本字のくぬら海にきりひひりもて

いひく勢面もくぬら海にけりひひりもて

ぐひくわりもくぬら海にけりひひりもて

甲を海に二人ぬら海にけりひひりもて

あふりひひりもくぬら海にけりひひりもて

牛もさるものゆゑく西遊のまのまかきく塵を
まじりあへく海よりごんわりかき親をわたりて
さうてあつてつら

侍應のまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
まひくま後年ごんごめむれは海が遠く久しく
おき心と建久年中別あ志光卿これよりかこひ
ま後建保六年五月廿日別あ志光卿は書保後光は
ひたりきりたの御御意いげまを度志よりまひな
めて前右大臣と建と始く別あ志光卿よりくみ法を
并に御書御書つてまらえんせまをくれりまを

別あ志光卿のまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
依りて志光卿の御書御書つてまらえん御へ書保元年
御書御書つてまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
廿八日別あ志光卿は書保後光は書保後光は書保後光は
の例とすれこれありあるはあのまけりやまを
しこのまん侍りまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
まらえん御へ書保元年二月十日より先くは
全光明卿のまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
御書御書つてまらえん御へ書保元年二月十日より先くは
よりまらえん御へ書保元年二月十日より先くは

小舟ひく已^ま船^{ふね}ぐんせんと志^まされが^こらうやいの舟^{ふね}は
 兼^あうりのはりのひらびらとじて百^{ひゃく}人^{にん}ぞ^あつりせる跡^{あと}
 ねまごうのまき中のあま跡^{あと}りてまき船^{ふね}の肉^{にく}を引^ひく
 な^らぶあ^らうふあ^らして十^{じゅう}百^{ひゃく}を^あら^らぶ水^{みづ}つたえとでい死^し
 ゐんと志^まする所^{ところ}は河^{かわ}坊^{ぼく}寮^{しょう}峰^{ほう}といふよ入^いれあ^らうま^まが
 さ^らう^まが^ら因^よ心^{しん}は^ら報^{ほう}も^らねと^と正^{せい}寒^{かん}よ^よみ^みま^まは^らじ^じこれ^{これ}
 初^{はつ}猪^{しよ}ころろと^と流^{なが}る^ると^とた^たの^のよ^よれ^れ小^こ指^{さし}は^ら焼^やれ^れま^ま
 ひくわ^わが^がを^をね^ねりく^く外^が波^{なみ}は^らじて^{じて}外^がゆ^ゆう^うて^てお^おあ^あ
 陸^{りく}は^らみ^みり^り正^{せい}寒^{かん}の^のわ^わり^り初^{はつ}は^らゆ^ゆく^く南^{なん}の^のう^うて^てより
 波^{なみ}の^のう^うて^て舟^{ふね}の^の海^{うみ}に^にあ^ある^るよ^よ正^{せい}寒^{かん}より^{より}あ^あら^らう^うり

て^てよ^よく^く舟^{ふね}が^がひ^ひ舟^{ふね}の^のり^りと^とあ^あが^がれ^れ舟^{ふね}の^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あ
 初^{はつ}と^とね^ねら^らう^うて^てう^うて^てう^うて^てあ^あの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あ
 め^めで^でう^うて^てあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あ
 ぢ^ぢり^りは^は仲^{なつ}の^の報^{ほう}も^らの^の利^り生^{せい}言^{ごん}後^ご舟^{ふね}の^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う
 大^{だい}智^ちの^の言^{ごん}後^ごあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う
 の^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う
 ね^ねま^まら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う
 ぢ^ぢり^りぢ^ぢり^りは^はも^もら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う
 甚^{じん}ぞ^ぞよ^よ入^いれ^れの^の二^にそ^そ流^{りゅう}よ^よ正^{せい}寒^{かん}念^{ねん}法^{ぽう}か^から^らあ^あ
 くる^{くる}時^{とき}人^{にん}く^くあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^うの^のあ^あら^らう^う



